

## はじめに

私は、大阪京橋・山本内科の恩師山本巖先生のもとで、薬剤師として長年調剤を担当した。本書は、実際の薬物運用を日々間近で拝見し、「病態と薬能の対応」を体感した私の記録である。

山本巖先生は、適合すると考えられる単味の生薬やエキス剤を毎日患者さんに試していただき、5分後および15分後の症状の変化を尋ね、薬物の薬能を確かめた。飲む前と飲んだ後の改善率を「30%」、「50%」と自己申告していただく。有効でない場合は、第2、第3の薬物を試した。5分、15分テストを日々繰り返し、膨大なデータを整理収集し考察し、どの病態に、どの薬物が最も効果があるのかを常に検証し続けた。それだけではなく、先生自らも薬物を服用し、個々の薬物の薬能と病態との対応関係を追究した。また、過去の多くの漢方医の残した書籍や文献から追試し、なぜ効くのかを薬能の観点から検討した。同じ病態・証であるならば、病名、臓器にとらわれず、他の疾患へも応用した。

薬能とは、古い時代から経験的に知られた薬物作用であり、解表・利水・補血・理気など漢方で使用する薬物作用のことを指す。現代医学、薬学の薬理学で解明されている単一成分の薬理作用とは隔たりがあり、動物を使った実験薬理学で再現、解明できないケースはまだ多い。先生は現代薬理学的研究を参考にするが、それだけにはこだわらず、多成分複合体である単味生薬の臨床薬能を重要視するお考えであった。

私が入門したとき、「まずは『増補能毒』と『臨床常用中薬手冊』を勉強し、薬能を理解するようにしなさい」といわれた。しかし、漢方について初学の私は、これらの古書を理解するのに大変苦労した。1984年安井廣迪先生が長沢道寿編集『増補能毒』（万治2年1652年開版）の復刻本を出版された際、山本先生は「復刻の序」に、「この『増補能毒』が気に入った最大の理由は、著者が臨床家であり、日常の診療を通じての薬物の使い方が具体

的に書かれているからである。他の著は理論のための解説が多い。そのなかにあって、この書は薬を用いる上での指針になる。臨床を行う者の、薬能の参考書の一つとして、この復刻は誠に意義が大きいと信ずる」と書かれている。

薬能の重要性について次のように話されたこともある。「薬能や方剤が分からなくては、真の随証治療はできない」「後世方の方剤は加減法が書かれている。それは、方剤の基本処方に加減法を加えて、一方剤ととらえることがとても重要だ。なぜなら、病人の証の変化に従って加減することが、方剤の効果を最大限に引き出し、真の治療につながるからだ。病人は千変万化で、全く同じ病人などはいない。基本処方を中心に病人の証に応じて薬物を加減して、投薬すべきである。薬能を十分に理解して、基本処方に加減して投薬することがとても大切である。各自の加減法をつくられんことを希望する」と。

しかし、現在のエキス剤中心の漢方医療業界は、病名とエキス番号を紐づけて対応しているケースがほとんどである。処方の意味(方意)と中身の薬能理解がさらに深まれば、エキス剤であっても的確な合方が可能になり、患者の病態に合った処方運用が可能になる。また、加減法が可能な煎じ薬に近づけることができると私は考えている。

先生が繰り返し言及された言葉を挙げる。

＊

- 「昔は、病に対する認識が十分でなく、原始的五感だけに依存した診療であり、病態の把握も難しく、薬物の薬能もあまり分かっていなかった」。
- 「これからは、漢方療法を再現性の高い医療にしなければならない」。
- 「誰がやってもそうなるというのが科学なんよ。わしの漢方は科学やから、誰がやっても結果は同じになるんよ」。
- 「病人と薬物が真の師匠であって、臨床を通じて真実を教えてくれる」。

＊

山本巖先生は昭和の時代、「証」「弁証論治」にとらわれていた古い漢方医学を根本から改革された。古方・後世方・中医学・一貫堂医学の流れを汲

んだ独自の「東洋医学的病態把握」と西洋医学の最新診断学・病態生理学、基礎医学の解剖学，生理学，生化学，病理学，薬理学を取り入れた「西洋医学的病態把握」を融合し，自らの治療指針を確立された．高い視座から総合的に病の病態を明らかにし，的確な薬物を薬能から吟味し，病に適応させる．誰が行っても同じ結果になる漢方の科学化を目指された．東洋医学でもなく西洋医学でもない，まさに「第三医学(Integrated Medicine)」を創られたのである．

私は恩師・山本巖先生生誕 100 周年に向けて，山本漢方医学の薬能論を書き残したいと考えるに至り，まず『増補能毒』復刻本の現代語訳から着手した．そして先生の著作や関連書籍，先生から直接教わった内容等を整理し，この度ようやく書物として纏め上げることができた．本書が，山本巖先生の臨床薬能を学ぶ契機になれば，著者としてこの上ない喜びである．

「恩師生誕 100 周年祭」に寄せて

桜の咲く季節，墓前に捧げる

2025 年 4 月

松原 圭沙彦

※本書では，本文中の諸先生方の敬称は略させていただきました．

## 凡 例

①坂東正造，福富稔明編著『山本巖の臨床漢方』上巻，第11章「漢薬解説」の効能別分類を参考に，各生薬を効能別に分類し解説した．分類の詳細は「目次」および本文を参照されたい．

②各生薬項目は，**薬能**，**山本巖の薬能論**，『**増補能毒**』の**薬能**，**運用の実際**，**臨床メモ**の項目を設けて解説した．

③**薬能**……各生薬項目の冒頭に生薬のもつ薬能の概要を一覧表で示した．

④**山本巖の薬能論**……山本巖著『東医雑録』巻1～3を参考に，山本巖の生薬の薬能に関する記述を筆者の視点から要約して整理し，各生薬項目ごとに箇条書きにしてまとめた．また，読者の便を考慮し，『東医雑録』の生薬索引の意も含め，各生薬項目ごとに関連する記述が掲載される『東医雑録』の巻数・頁数を付記した．

⑤『**増補能毒**』の**薬能**……長沢道寿\*編『増補能毒』（東洋医学古典復刻叢書1），自然社（1984年）を底本に，収載される生薬数151種のうち，臨床での使用頻度が高い生薬135種について現代語に翻訳し収録した．

⑥**運用の実際**……『臨床常用中薬手冊』『漢薬の臨床応用』『中薬大辞典』『漢方処方の基礎と臨床応用』をはじめ，多数の参考文献から薬物の重要薬能を選別して収載・解説し，運用頻度が高い参考処方付記した．

⑦**臨床メモ**……生薬解説，疾患病態と薬能の対応，副作用情報のほか，山本巖の薬物の使い方と直伝の内容，常用の修治法，エピソードなどを列記して書き留めた．

---

\* 長沢道寿（?～1637年）は，後世派の流れを汲み，曲直瀬玄朔の門下にあつて頭角を現した医師の一人である．父は長沢理慶で初代曲直瀬道三の弟子であつた．もともと『増補能毒』は，長沢道寿が弟子のためにまとめたもので，門外不出であつたが，門人がそれを惜しみ，世に広めようと出版した書である．内容は曲直瀬道三の『薬性能毒』のように一つの薬物について「能」と「毒」を記載し，金元医学理論を用いて解説してある．具体的かつ明快な記載が特色である．